

序

「正常像と並べて理解する病変像」は、超音波書のあるべき姿、理想的な姿と信じております。もちろんこれまでにも主旨を同じくする書物はいくつか発売されてきましたが、すべての疾患画像に対応する同部位の正常像を対比掲載したものを見つけることはできませんでした。

正常像と病変像との対比、これはすべての画像診断の基本であります。特に超音波検査では大切です。検者は探触子を当て、それを動かすことにより時々刻々変化するモニタ上の画面から異常所見を拾い上げ、それを診断し、記録してゆきます。ここが、記録してから診断するCTやMRIとは異なります。瞬間の画像を異常と見極めるためには、検査している臓器の正常像を常に頭に思い浮かべ、比較検討する必要があります。肝腫瘍のように、非腫瘍部と隣り合わせに描出できる疾患であればまだしも、びまん性肝疾患や炎症性消化管疾患のように、対象臓器全体が異常を示し、同一画面内に正常と異常を並べて表示できない場合には特にその必要性が増します。

正常所見を頭に入れ、検査中に思い浮かべて使えるようになるためには、たくさんの症例を経験する必要がありますが、それには多大な時間と労力を要します。その手間を少しでも軽減し、効率の良い学習をサポートしてくれるのが良い参考書といえます。

そのようなことをただ漠然と考えていたときに、本書執筆のご提案をいただきました。自分の思いを叶えられる、またとな
い貴重なお申し出です。感謝と気合いをこめ、速攻でお受けい

たしました。ところが作業に入ってみて驚きました。これまで撮り貯めてきた各種疾患の画像が、今の時代にふさわしくないほどに古いのです。せいぜい一世代か二世代前の装置で撮った画像なのですが、今使っている最新装置の正常画像と並べると緻密さなど別物に見えるのです。装置の進歩の大きさにあらためて驚かされると同時に、ただ漫然と新しい装置に乗り換えてきた自分の中の正常像、基準像は、使い物にならない陳腐なものではないかという不安にも駆られました。そのような思いもあり、本書では、すべての疾患において、可能な限り新しい世代の装置画像でそろえるように努力しました。さらに近代超音波の最先端を走るお一人、畠二郎先生に編集と執筆両方で多大なるご協力をいただきました。

最近の世の中、たくさんの検査をして自分を作り上げてゆくという旧来の修行が成立しづらい機運にありますが、そのような日常臨床の場で用いる参考書として、本書はかなり役立つ内容になっていると自負しております。いつも身近においてちょっと参照、といった手軽な使い方をしていただけると幸いです。

最後になりましたが、編集作業にご協力いただきました畠先生、そして画像収集等々大変な労力ご提供いただきました執筆者の先生方には心より御礼申し上げます。また、私の亀にも似た遅い進行に半分あきれながらも温かくサポートしてくださいり、発刊へとこぎつけてくださった編集部の中川由香氏、北本陽介氏をはじめ羊土社の皆様に厚く御礼申し上げます。

2008年8月

東邦大学医療センター大森病院消化器内科 住野泰清